

## 子供服デザインへの試論 第二報

——衣服の色の好みと性差を表す色の認識に関する時系列調査——

鈴木直恵\*

### An Approach to Children's Costume Design (Part II)

——A Time Series Survey of Color in Children's Clothing Including  
a Comparison of Color Preference between Boys' and Girls' clothing——

Naoe Suzuki

要 旨 子供の年齢に応じて彼等を取りまく社会環境が変化し、内的にも成長が見られ、その時々に応じて彼等が求める衣服にも変化が予想される。

1988年、4歳児を対象とする衣服の好みの色と、色の性差区分に関する調査を発表した。今回も同一対象者に同じ調査を試みた訳であるが、それは、彼等を取りまく環境を一定に保ち、彼等の内的成長の把握に焦点をおいたからである。

5歳児は4歳児段階より格段と言語表現が高まっており、自意識も強まっていた。彼等は自分に引きつけて衣服の色を判断し始めており、特に女兒については、それが著しく見られた。「似合う」「かわいい」「かっこいい」などの表現は、その表れであろう。ところが色の性差区分については、以前の調査と大差がなかったことは注目される。このことから、自意識の強まりにもかかわらず、色の性差区分が、4歳児段階で強く定着している事がわかった。

## I 緒 言

本報は、筆者の『子供服デザインへの試論第一報』<sup>1)</sup>における被調査者を次年度に同一調査内容で追跡調査を行ったものである。

4歳児は、一般に想像的な心性を活発に働かせ、自己表現の欲求を強めているが、その一方では他人の感情まで細やかに読み取って対応する年齢ではないと言われている<sup>2)</sup>。それに対して5歳児は、自己抑制の力が増大し、周囲へのより広い関心を示すようになり、そこに新しい発見を見い出すことに強い興味を示し始めている<sup>3)</sup>。こうして彼等は、周囲を取りまく社会的状況との関連性で、自分の好みを決定してゆく

ようになると言われている<sup>4)</sup>。また、言語行動機能の発達においても、動機づけを意味する「なぜ」「～だから」の発話が多くなる年齢に達する<sup>5)</sup>。

そこで、彼等の言語表現による理由づけから彼等の色の好みや性差を表す色の分類がどのような過程から生み出されたものなのか明確化する事も可能と考えた。

本報は、5歳児の衣服の色の好みや色の性差区分を明らかにし、更に、4歳児から5歳児に到る内的成長と彼等の服装観の変化との関連をも明らかにすることを目的としている。

## II 調査方法及び調査項目

### 1. 調査時期

1989年8月1日～13日

\* 本学講師 服装デザイン

2. 調査対象者

第一報の被調査者と同一幼児，男児51名，女児42名である。ただし被調査者の転居等で調査人数が減少している。

3. 調査項目，調査方法

第一報の調査と同一調査項目で実施した。方法は面接調査とし，その後単純集計，クロス集計，及び $\chi^2$ 値を求めた。

Ⅲ 好みの衣服の色に関する調査結果の時系列的変化・性差についての考察

1. 好きな洋服の色の変化と性差

図1に示すように，5歳児の男児は4歳児の時より赤が27.4%から31.0%へ，青が15.0%から23.0%へと好みの増加がみられる。また，赤紫が5.5%から0.0%へ，ピンクが1.4%から0.0%へと好みの減少がみられる。それに対して，5歳児の女児は，ピンクを42.0%から34.0%へとやや減少しているが，高い率で好んでいる。ただし，一極集中の傾向は多少弱まり，黄で6.0%から26.0%，赤紫が4.0%から12.0%な

ど，多様な色への好みの変化がみられる。

男女間の有意差についてみてみると，4歳児においては，12色のうち有意差が認められたのは，青，ピンクの2色のみであった。しかし5歳児においては図1に示すように，赤（ $P < 0.05$ ），黄（ $P < 0.05$ ），青（ $P < 0.05$ ），ピンク（ $P < 0.05$ ），赤紫（ $P < 0.05$ ），黒（ $P < 0.05$ ）の6色に有意差が認められた。このことは，彼等が，より多くの色を「性」によって区別する傾向が強まっていることを示している。男児が好む寒色系の色や黒は，「男らしさ」を意味し，女児が好む暖色系の色は「女らしさ」を意味するのであろう。このように，4歳児に比較すると，5歳児は，好みの色が多様に分化し，より多くの色を性差で区分し始めている。このことは，以下に述べる彼等の内的な成長とも関連すると考えられる。

2. 好みの理由と性差

4歳児での調査では，「何故その色の洋服が好きなの」という問いかけに対して，ほとんど答えが返ってこなかった。まれに，女児において「かわいいから」という答が返ってきたが，

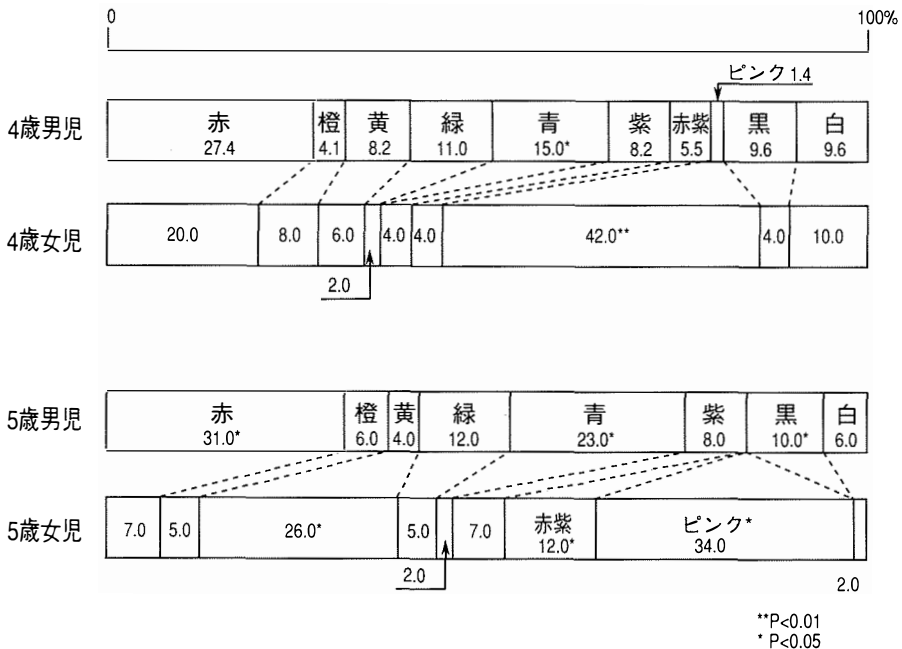


図1 好きな洋服の色

それも全体のうち1%にも満たない解答率であった。5歳児に成長した彼等は、好みの理由について、だいたい流暢に説明するようになった。その理由を次に示す。

男児

- 赤の洋服を好む理由：かっこいいから（26%）、きれいだから（9%）、赤い色が好きだから（9%）、無回答（56%）
- 青の洋服を好む理由：かっこいいから（25%）、よく着るから（8%）、きれい（9%）、無回答（58%）

女児

- ピンクの洋服を好む理由：きれいな色（14%）、いい色だから（7%）、小さい頃から好き（7%）、きれいで女の子に似合う（7%）、かわいい（22%）、無回答（43%）
- 黄色い洋服を好む理由：きれい（36%）、ピカピカにひかっている（9%）、かわいい（9%）、ミカンの色だから（9%）、クレヨンと同じだから（9%）、無回答（28%）

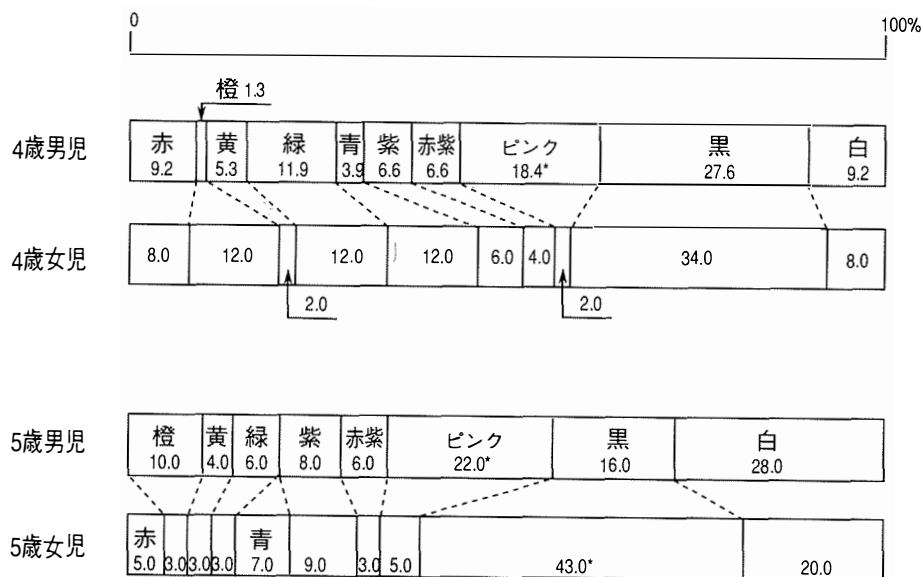
以上のように「何故この色の洋服が好きなのか」という理由づけを彼等なりにあげている

が、全体としてその理由づけは、「かっこいい」「かわいい」「きれい」の3つの要素に集約できる。また、「かっこいい」は男児のみの理由づけに使用され、「かわいい」は女児のみの理由づけとして使用されている。従って、この2つの用語は、あきらかに性差を表わす表現として使用されている事がわかる。

### 3. 嫌いな洋服の色の変化と性差

嫌いな洋服の色は、図2に示すように、男児は、白（28.0%）ピンク（22.0%）黒（16.0%）を嫌い、4歳児当時より白を嫌う率の増加がみられ、黒だけを嫌う傾向がうすれた。また、赤は9.2%から0.0%へと減少している。女児は、黒（34.0%）白（20.0%）と、この2色を集中して嫌う傾向にあり、白は8.0%から20.0%へと嫌う率の大幅増加がみられた。5歳児全体でみると、黒（28.0%）は、4歳児同様に一番嫌いな色になっている。

$X^2$  値を求めると、ピンク（ $P<0.05$ ）及び黒（ $P<0.05$ ）に有意差が認められた。4歳児当時は、黒は男児女児共に非常に嫌われ、有意差も認められなかった。今回の調査では、全体



\*  $P<0.05$

図2 嫌いな洋服の色

的には黒が一番嫌われているのであるが、女兒が嫌う割合がさらに深まり、有意差が認められた。

#### 4. 嫌う理由と性差

「何故この色の洋服が嫌いなのか」という質問に対して、5歳児は、具体的にその理由を説明している。

男児

- 黒の洋服を嫌う理由：つまらない(12%)、かっこ悪い(13%)、暗くていやだ(38%)、パパがいやだと言うから(12%)、無回答(25%)
- 白の洋服を嫌う理由：おもしろくない(7%)、色がなくてつまらない(57%)、無回答(36%)
- ピンクの洋服を嫌う理由：女の子の色だから(23%)、女だから(15%)、無回答(62%)

女兒

- 黒の洋服を嫌う理由：きたない(6%)、変だから(6%)、お葬式みたい(6%)、女の子に似合わない(6%)、暗くていや(13%)、黒だから(38%)、無回答(25%)
- 白の洋服を嫌う理由：似合わない(13%)、お母さんが嫌い(13%)、色がなくてつまらない(37%)、おもしろくない(13%)、無回答(24%)

以上のような理由をあげているが、その他の色に関しても、嫌う理由を次のように説明している。

男児

- 緑(はではで) ◦赤紫(女の子みたい、かっこわるい)

女兒

- 橙(うすいから) ◦青(赤ちゃんの頃よく着ていたから) ◦緑(色が男の子っぽい) ◦赤(はでだから) ◦紫(暗い、いつも着ていない)

このように5歳児は、「何故好きなのか」という問いかけよりも、「何故嫌いなのか」という問いかけに関して、はっきりした答えを出している。

嫌いな理由の中で特に目立つのは、次のようなものであった。男児の中では、「ピンク＝女の子の色＝嫌いな色」という等式が成り立っており、また女兒でも、「黒＝女の子に似合わない＝嫌いな色」という等式が成り立っており、そのため、黒は男の子の色として婉曲に敬遠されているのである。このことから、5歳児は、色の区分において、性差を強く意識し始めている事が、明らかになった。

#### 5. 着装イメージと性差

「好きな洋服の色」、「嫌いな洋服の色」という相対する2つの質問に対して、女兒は、「似合うから好き」、「似合わないから嫌い」という発言をしている。単に、「この色は好きだから」というのではなく、衣服を装う事を想定して、「好き」と答えている訳である。つまり、色自体を「好き」、「嫌い」と判断するのではなく、「似合う」、「似合わない」という着装イメージを前提条件とし始めている。この事は、4歳児の女兒には見られなかった5歳児の大きな特徴である。また、男児も、「女の子の色だから嫌い」、「かっこいいから好き」という発言が示すように、集団活動の中で性差による役割の違いが強く影響を及ぼし始めている。

一般に5歳児は、自己像を確立する時期にさしかかっているといわれている。この事は、本研究の結果ともよく一致しており、衣服の色の選択の過程の中にも表れている。逆にこれを見れば、衣服の判断や選択が彼等の自己像の確立に大きな役割を果たしているのかもしれない。

## Ⅳ 性差を表す色についての結果と考察

### 1. 時系列的变化

性差を表す色のとらえ方について時系列的にみてみると、図3に示すように4歳児と5歳児では、そのとらえ方に大きな変化がなかった。このことをどう考えるべきであろうか。一般的に、性別役割習得プロセスの中で現れる性差は、生物学的な違いというよりも、社会的・文化的作用が、大きな役割を果たしていると言わ

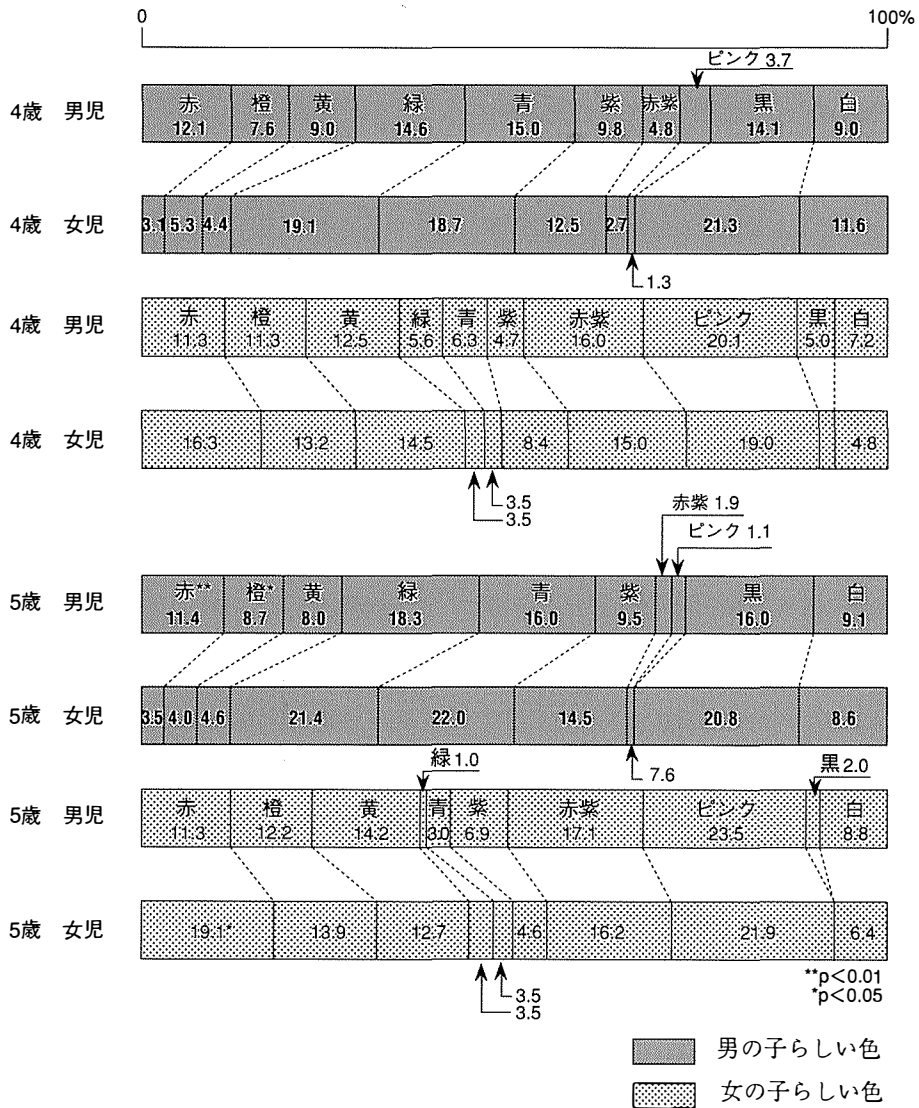


図3 性差を表す色

れている<sup>6)</sup>。また、4、5歳になると自己の性別の認識が現れ始め、性別行動様式について習得するようになるとも言われている<sup>7)</sup>。

この事は、本研究の色の性差区分に関する結果とよく一致する。この区分には、個々の幼児の好き嫌いの感覚が作用するというよりは、「性差についての社会的な区分」の影響が強く作用していると考えられる。つまり、「好きな洋服の色」と「自分が属する性の色」とが、彼

等においては必ずしも一致していない。たとえば男児が一番好んだ赤は、両性具有の色として理解されており、嫌いな色としてあげた黒は、男の子らしい色と把握されている。つまり、彼等は、自分の好き嫌いの感覚を離れて、男児・女児としての性別行動様式として色の区分をなしとげているのである。

次に注目すべきことは、色の性差区分については時系列的にほとんど変化が見られなかった

ことである。このことは、4歳児段階で「性差についての社会的な区分」の影響が深く個々の幼児に根を下しており、5歳児段階になってもそのまま維持されていることを示しているであろう。


2. 性を表す色についての性差


5歳児がとらえる性差を表す色は、図3に示すように、「男の子らしい色」として男児は、緑(18.3%)、青(16.0%)、黒(16.0%)をあげている。女児も同じように、緑(18.3%)、青(16.0%)、黒(16.0%)の順にあげている。「女の子らしい色」として、男児は、ピンク(23.5%)、赤紫(17.1%)、黄(14.2%)をあげ、女児は、ピンク(21.9%)、赤(19.1%)、赤紫(16.2%)の順にあげている。また、男女別の有意差をみると、「男の子らしい色」において、赤( $P<0.01$ )、橙( $P<0.05$ )に有意差がみられ、「女の子らしい色」において、赤( $P<0.05$ )のみに有意差がみられた。このように、男女間で色の性差区分にはほとんど相違がみられないのは、「性差についての社会的区分」がかなり作用していると考えられる。彼等の多くが、乳児の頃より、ピンクとブルーの世界、つまり「女児」と「男児」の世界になじまされ

ていることは日常よく見かけるのであり、5歳児においても、いまだにその影響が持続しているものと思われる<sup>8)</sup>。

V 女児が好む衣服デザインについての結果と考察

図4で示すように、4歳児の時に示した傾向を5歳児においても示している。5歳児は、好む理由を次のように述べている。

 を好む理由：3段になっているスカートの部分が好き(38%)、きれい(8%)、明るい(4%)、ひらっとしてきれい(13%)、ドレスみたい(2%)、かわいい(13%)、無回答(22%)

 を好む理由：花が付いているから(29%)、スカートが長いから(7%)、ドレスみたい(7%)、かわいい(21%)、きれい(22%)、無回答(14%)

5歳児の女児は、「何故この洋服が好きなの」という問いに対して全体的な洋服のイメージもさることながら、デザインの細部にわたっても反応している。5歳児の女児にとって、三段になっているティアードスカートは、ロングスカ

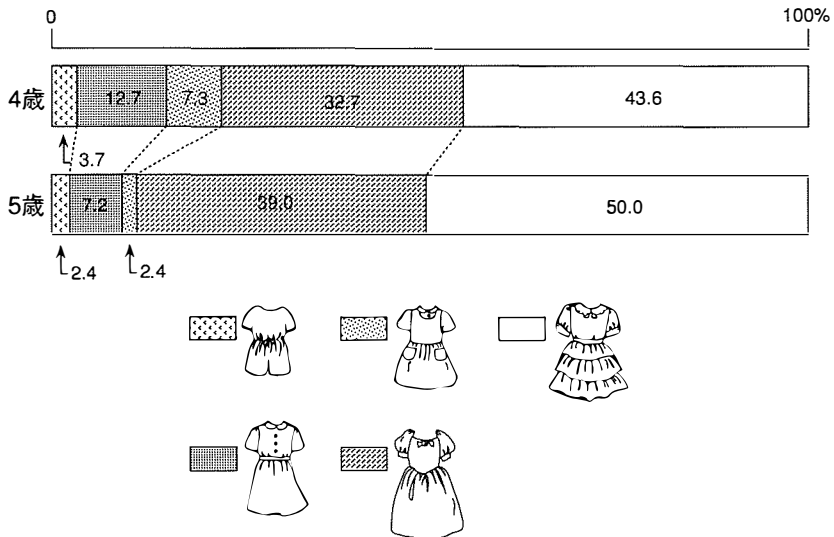


図4 女児の好む洋服のデザイン

ートよりも、「ひらひらして」、「明るく」、「夢」があり、そして「彼等の年齢にそう」と考えているようだ。

## VI 衣服の色の好みと色の性差区分との関連性についての時系列的考察

4歳児と5歳児とでは、衣服の色の好みと彼等がとらえる性差との間に、どのような類似点や相違点があるのであろうか。

赤を女の子らしい色とするのが、4歳女児の場合16.3%、5歳女児の場合19.1%と2.8%増加している。にもかかわらず、「好きな洋服の色」として赤を選択するのは、20.0%から7.0%へと激減傾向を示している。

このことから、5歳児としての「自意識」の成長が作用していると考えられる。つまり、赤は女の子らしい色としては認めるが、自分が着る衣服としての赤は、もはや選ぶところではない、という訳である。こうして、黄色や赤紫の衣服へと5歳女児は好みを移行させている。

ところが、黄色について見ると、全く反対の現象があらわれている。4歳女児と5歳女児とでは、「女の子らしい色」として見る比率が、14.5%から12.7%へと微減しているにもかかわらず、「好きな洋服の色」として、6.0%から12.7%へと顕著な増加を見せている。ここにも、「黄色い服を着てみたい」、「黄色い服はかわいい」という自意識が反映していないだろうか。

男児については、以上のような傾向はほとんど見られない。すなわち、4歳と5歳とでは、「男の子らしい色」の比率も、「好きな洋服の色」の比率も大差が見られなかった。

## VII 結 語

今回の調査結果から、つぎの事が明らかになった。

1. 好きな洋服の色は、男児は赤、青への好みが強くなり、女児は依然ピンクを高い率で好

んではいるが、黄や赤紫など多様な色も好むようになった。

2. 好きな理由として、男児は「かっこいい」女児は「かわいい」「きれい」などの理由をあげている。

3. 嫌いな洋服の色として、男女共に黒、白をあげ、さらに男児はピンクをあげている。

4. 嫌う理由として、「性」を意識した理由をあげている。つまり、「男の子の色」=嫌い、「女の子の色」=嫌いとはっきりと説明している。

5. 女児には、自分にとって「似合う」、「似合わない」という着装イメージが芽生えている。

6. 「好きな洋服の色」と「自分が属する性の色」が必ずしも一致しない。

7. 性差を表す色は時系列的に変化がなかった。この事は、4歳児段階ですでに「性差についての社会的区分」が定着していることを意味している。

8. 性を表す色は、大人の色彩観念の影響が作用しており、5歳児にとって、ピンクとブルーの世界が確立している。

9. 女児が好む衣服デザインは、4歳児の時と変わらない。しかし、好む理由として、洋服の全体的イメージよりも細いディテールに対して注目している。

10. 衣服の色の好みと彼等がとらえる性差との間には、自意識が働いている。

以上のような結論を得た。前報において、4歳児は、自己の「好み」を強く働かせて衣服の色や形を認識しているという結論を得ている。本報においては、5歳児に成長した彼等は、衣服の色の選択過程に性別行動様式を反映させ始め、「性差」や周囲の状況との関連の中で、判断し始めているという結論を得た。

1990年、彼等は、学校集団に所属した。学校集団という「規律」のある集団の中で、彼等は今後どのように衣服に対する感覚を展開するのであろうか。

今後も、学校集団という枠組みの中で、学年

を追って時系列調査を行い、彼等の内的成長とともに、彼等の服装観がどのように変化・成長してゆくのを明らかにしてゆくつもりである。

最後に調査に御協力いただいた被調査者の皆さんと、関係諸機関の皆様に、心から感謝致します。

注

- 1) 鈴木直恵著：子供服デザインへの試論第1報—4歳児の色と形に対する認識と好みの傾向—, 文化女子大学研究紀要第20集, 1989年
- 2) A・ゲゼル著, 依田新, 岡宏子訳：乳幼児の発

達と指導, 家政教育社, p. 299~301, 1983年

3) 浜田寿美男訳編：ワロン/身体・自我・社会, ミネルヴァ書房, p. 31~66, 1986年

4) 大伴茂著：ピアジェ 幼児心理学入門, 同文書院, 1970年

5) 村田孝次著：幼稚園期の言語発達, 培風館, p. 139~164, 1982年

6) J・ブルックスニガン, W・シェンプ・マチュウズ著, 遠藤由美訳：性別役割 その形成と発達, 家政教育社, p. 97, 1985年

7) 同上著, p. 97~126

8) 同上著, p. 83